子どものこころ

ダウン症の兄と幸せやった

落語家 露の団六さん 54

物心ついたときには、隣にけったいなやつがおった。ご飯をポロポロこぼす、うまくトイレができない、一人で風呂に入れない。そんな兄貴に「ええかげんにせえ」と言いながら手伝ってました。両親は「弟やねんから、しっかりせな」と。でも変やと感じたことはなかった。僕にとってはそれが当たり前やったから。

神戸市東灘区深江で生まれ育った。会社員の父と母、重度のダウン症で2歳上の兄、典生さんとの4人暮らし。

兄貴は心臓が悪いこともあって、面接に行った小学校や通園施設は「何かあったら困る」「家で大事にしてあげて」という反応やったらしい。役所からは就学猶予願を書くように勧められたそうです。願ってなんかない就学猶予の通知を受け取った母は、漢字が読めない私に、「学校に来るなやて」と言うたのをはっきり覚えてます。先に地元の小学校に入った僕のランドセルを、兄貴が家の外に放り投げたこともありました。

典生さんは2年遅れて私立の小学校に入学。兄弟は同学年となった。

家の中で兄貴とよくやってたのが、プロ野球選手の動きをまねる野球ごっこ。ゴムひもが付いた座布団を防具に見立てて首から提げ、キャッチャーとかのまねごとをするんです。僕が大スターの江夏豊投手になって投げる格好したら、バッターの兄貴は三振するのがお決まり。なのに兄貴はヒットを打つふりするので、「三振せえ」って怒ってました。

NHKの幼児番組「おかあさんといっしょ」も一緒によく見ました。母が挿入歌を口ずさむと、カーテンに隠れてた僕らが「はーい」と飛び出し、踊るんです。当時はやったキャラクター「ケロヨン」も好きで、歌ったり踊ったり。おやじはその様子をうれしがって、買ってきた中古のレコードをずっとかけてくれてました。幸せな日々でしたね。

自宅があった公営団地は4棟あり、子どもが多かった。野球にサッカーと、遊び相手には困らなかった。

周りには目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりする子どももいたけど、なんとか一緒に遊べるよう、みんなで自然と知恵絞ってた。

団地の広場で野球をする時、目が見えない友達には、「僕が打つから、代わりに走り」と言うて、「おーい、ここやー」と大きな声を掛けたり音を出したりして、走る方向を知らせるんです。

うちの場合は「お前の兄貴、あほやから横で見とき」って。言葉は悪いけど、その「あほ」ってアイラブユーのことなんですよね。遊び疲れて、晩ご飯できたら一緒に帰る。何もでけへんからって、つまはじきにすることなんてありえへんかった。

近所のおばちゃんやおじちゃんも兄貴をかわいがってました。幼稚園のとき、兄貴がもらったお小遣いをこっそり取り上げ、アイスクリームやキャラメルを買ってました。もちろん、母に見つかって「何すんねん」とこっぴどく叱られました。

地域が兄貴を見守ってくれてました。人と人のつながりが濃かった。いまだに幼稚園と小中学校の同窓会が続いているぐらいですから。

「5、6歳まで生きられない」と医師に告げられた典生さんは56歳になった。高座の傍ら、各地で障害者団体などが開く会で講演している。

我が子の障害を知って、何年も笑顔を失った親を何人も見てきました。そら、家族は仕事や結婚の際も悩まなあかんから。でも気付くことがいっぱいあって、めっちゃ面白いし、人に優しくもなれる。

不幸なことがあるとしたら、その子が親の泣き顔しか見られへんこと。よその家に生まれて、そんな思いするぐらいなら「うちに来い」と言いたい。僕なら「なんでやねん」って言いはしても、1秒後には笑って迎えてやれる。僕だって一人で生きてるわけやなくて、色んな人に支えられて生かされてるんやから。

「確かに兄貴は勉強も金もうけもでけへんけど、悪いことはせえへん。不幸と思う人が不幸なんです」(大阪市内で)＝奥村宗洋撮影

つゆの・だんろく　1958年生まれ。神戸大教育学部在学中、二代目露の五郎兵衛(当時は露の五郎)の落語に感動し、休学届を出して80年に弟子入りした。2004年、典生さんとの日常をつづった「あほやけど、ノリオ」(中央法規出版)を出版した。